

120周年の節目の年に描く 輝く未来の青写真

着々と整備が進む 県都の新たな「顔」づくり

市制施行120周年を迎えた岐阜市の今年度のキーワードは「翔る(かける)」である。この言葉にかける思いを細江茂光岐阜市長は次のように語る。

「金融不況後の厳しい状況下で、新年度を迎えました。しかし、そのような厳しい状況だからこそ、岐阜市は、すべからず協働の精神で敢然と立ち向かう必要があります。豊かな歴史や資産を足掛かりに、市民の皆さんや市内に立地する企業、大学などと手を携えなくてはなりません。『翔る』というキーワードには、暗く重苦しい現在の時勢から、協働の精神で、明るい未来に向けて翔け上がるという思いが込められているのです」

岐阜市ではこの市制施行120周年に当たる今年度、市主催事業、市民公募自主事業を併せ、さまざまな記念事業を実施する。

「120周年を迎えた今年度は、さらに、未来への礎としての新たな『教育』システムの構築、未来への備えとしての市民の暮らしの『安心』の実現、未来の『元氣』の源泉となる新たな産業と交流が生み出す活力の創出、それらをより一層の重点政策の柱としてまいります。同時に『不断の行財政改革』にも引き続き、精力的に取り組んでいくつもりです」(細江市長)

その象徴的プロジェクトの一つが、岐阜市の表玄関であるJR岐阜駅周辺の再開発だ。北口駅前の西側にそびえる「岐阜シティ・タワー43」は、平成19年に完成したばかりの地上43階、地下1階の超高層ビルで、岐阜駅西地区第一種市街地再開発事業として建設された複合ビルだ。建物の高さ163mは中部圏最高(平成19年現在)で、低層部分には商業施設のほか岐阜放送本社が入り、6階から14階は高齢者向け優良賃貸住宅、15階から42階は分譲マンション、最上階はスカイラウンジと



細江茂光
岐阜市長

展望台になっている。ちなみに分譲マンションは平成17年の販売開始と同時に即日完売したという。

北口の駅2階から翼状に左右に延びるペDESTリアンデッキ(U字型デッキ)に囲まれた駅前広場では、植栽工事が着々と進みつつある取材は3月末。北口駅前広場は、完成すると在来線の駅としては全国一の広さになる。

「JR岐阜駅は『杜の駅』をイメージしています。北口駅前広場が完成すると、植栽された樹木がちょっとした杜のようになります。どちらかというと住宅街区の色が濃い南口側駅前には清楚で静謐なイメージです。対照的に北口側は、都心部がある岐阜市の玄関口としての利便性の向上や、都市機能の充実化が図



中心市街地活性化の起爆剤ともなった岐阜シティ・タワー43は岐阜駅前にそびえる新ランドマーク

られます。私たち市民が長い間待ち望んでいた、岐阜都市圏100万人にとつての新たな岐阜の顔、シンボルとして位置づけています」(細江市長)

中心市街地活性化の柱は 岐阜駅前から柳ヶ瀬までの再開発計画

岐阜駅周辺だけではない。飲食店の集積を中心とする商業地区として、全国的にも有名な柳ヶ瀬地区の再開発事業、北口駅前商業地区の再開発事業、鵜飼で知られる長良川河畔の伝統的な町並み景観(川原町地区)の整備なども同時に進められている。こうした複数の再開発事業が動き出す契機となったのが、岐阜シティ・タワー43の成功にあったと細江市長は言う。

「繊維関係の間屋街が多く集積している北口駅前、都心部への動線を考えると人の流れの面が停滞の原因となっていました。以前から再開発の必要性が議論されてはいたものの、動きは活発ではありませんでした。しかし、シティ・タワーの成功で急速に活気づき、今年中には37階建ての超高層再開発ビルが着工される運びとなっています(注：間屋町西部南街区第一種市街地再開発事業。平成23年度竣工予定)。このビルにも約200戸の分譲マンションが上層部に建設される予定です」

岐阜市は平成18年度中に中心市街地活性化基本計画を策定し、翌19年度早々に国の認定を受けた。岐阜駅前から柳ヶ瀬に至る地区の



岐阜市が提唱するスロートーリズムを支える柱の一つは市営のレンタサイクル



市民のまちづくり会議も開催される柳ヶ瀬あい愛ステーション(写真は「まちあるきマップ」編集会議の様)

(岐阜県)

昨年11月15日、JR岐阜駅に隣接する岐阜市文化産業交流センター（じゅうろくプラザ）において「第1回 信長学フォーラム」と題するイベントが開催された。美濃を制するものは天下を制すとうたわれた戦国時代、数ある戦国武将の中でも個性際立つ一代の風雲児・織田信長が岐阜城に在城した約9年間は、文字通り、天下が岐阜を中心に回っていた。

「信長公が美濃稲葉山城に入城して岐阜城と改め、城下町・井ノ口も岐阜と改められた1567年から安土城に移るまでの9年間。室町幕府の事実上の代行者として天下布武の朱印状を発行したり、時の将軍・足利義昭を奉じて上洛するなど、天下統一の基礎を築きました。岐阜城から安土城に移って6年後に本能寺の変に見舞われたことを考えると、武将としても一番の盛りを岐阜で過ごしたといえるでしょう。『信長学フォーラム』は信長公の領国経営の手法、楽市楽座など岐阜を舞台に見せた各種の斬新なまちづくり施策、中世を一気に近世へと近づけたとされる『時代（天下）をリードする思想』などに学び、それを現代の岐阜市におけるまちづくり、人づくりにもつなげていこうとする試みです」（細江市長）

再開発事業はその柱の一つとなる。「岐阜市にはJR岐阜駅と並ぶ玄関口として名鉄岐阜駅があります。今後はJRと名鉄の岐阜駅とを結ぶ結節点であるJR岐阜駅東地区再開発の検討にも本腰を入れて取り組む予定です。さらに名鉄岐阜駅前から柳ヶ瀬方面に至る商店街の再活性化にも取り組みます。ここは、かつて市内随一の繁華街としてにぎわいましたが、百貨店などの大型商業施設の相次ぐ撤退などにより、中心市街地の空洞化が進行していました。この柳ヶ瀬地区の再活性化と周辺商業地区の再開発事業の手始めとして昨年7月、新たなまちづくり拠点『柳ヶ瀬あい愛ステーション』を開設しました」（細江市長）

柳ヶ瀬あい愛ステーションは「まちなか情報発信拠点」として、商店街の情報発信などのほか、市民や観光客の交流サロン、ボランティアグループなどのためのまちづくり会議室、キッズコーナーまで完備した多機能交流施設としての役割を果たし、市民から早くも親しまれ活用されている。

柳ヶ瀬地区では今後、大衆演劇の劇場を核とした活性化事業や空き店舗活用事業を積極的に展開する。また由緒ある古社・金神社に隣接する金公園の整備にも着手する。最終的にJR・名鉄の両岐阜駅前から金公園、柳ヶ瀬、長良川河畔、岐阜公園に至る回遊コースの構築も視野に入れている。

また、岐阜市ではスローライフのまちづくり



昨年11月、盛況のうちに開催された「第1回 信長学フォーラム」

岐阜市ならではの「信長公」を生かしたまちづくり

網羅され、「まちなか回遊路」として出色であることが実感された。

第1回目となった昨年のフォーラムでは、歴史学者などの多彩な講演者が織田信長の「人間像」を語った。パネルディスカッションでは信長が築いた城郭や城下町の建設思想、経営思想などについて、熱心な議論が交わされた。

とが予測されていたが、実際に発掘作業が進むにつれ、その予測の正しさがあらためて確認されつつあるという。

長良川河畔の遊歩道(長良川温泉前)



岐阜市の象徴は日本有数の清流・長良川(正面右の山は岐阜城を頂く金華山)

の理念の下、「まちなかレンタサイクル事業」に力を入れている。JR岐阜駅南口、市役所南庁舎、市立歴史博物館など数カ所にサイクルスポットを設置し、どこから乗ってどこで返却してもいいシステムである。取材の折にこのシステムを活用し、岐阜駅〜金公園〜柳ヶ瀬〜岐阜公園〜長良川をレンタサイクルで走破してみた。このコースは岐阜市の歴史的要素・文化的要素・各種商業集積などが



毎年10月第1土曜・日曜に行われる「ぎふ信長まつり」



長良川鵜飼船乗り場に至る川原町の歴史的町並み



市民の憩いの場である岐阜公園

岐阜市が行ってきた財政基盤確立に向けた努力は、市営バス事業の民間譲渡、保育所民営化、職員定数の削減（昭和56年の4996人から平成20年には1000人以上の削減）、給与の適正化（平成19年度には中核市中、4番目に低いレベルに）、地方債残高の縮減（平成11年に1362億円あった普通債が平成19年には919億円、平成20年度末には866億円に）などとなって結実した。

その結果、行政革新度ランキング（日本経済新聞・平成20年12月1日付。市民参加度も含む）では、全国806市区（当時）のうち第10位と評価された（平成18年度は16位）。「三位一体改革で国からの交付税が急減した現在、健全財

**120年目の躍進を支える
行財政改革と教育立市**

深刻な金融不況下において、市制120周年を機にさらなる積極的市政運営を実施できる岐阜市の大きなバックボーンは、ここ数年来、果敢に取り組んできた行財政改革の効果である。

政を維持するには緊縮だけでなく、限られた財源を有効な事業に、より多く振り分ける選択と集中の見極めが、何よりも重要になります。そういう意味で岐阜市では、将来の岐阜市を背負う人材育成のため、特に教育立市を意識した施策に力を入れているのです」（細江市長）

岐阜市では厳しい経済情勢の下、限られた財源の中から特に義務教育の充実に注力している。具体的には校舎の耐震化（約60億円を使い5年間で整備）、コミュニティスクールの推進、小中一貫英語教育の推進、ふるさと学習教材の整備、授業理解のための教育備品整備など多彩な事業を推進してきた。

「現代のように時代が大きく変化するとき、社会を変革する最大のインフラは、人です。特に先端技術が時代を形成する現代から近未来にかけて、優秀な人材の集積するところに企業も集積します。新時代の岐阜市を支え、発展させていくのはそうした人材だとの観点から、とりわけ情報化教育、英語教育、キャリア（起業家）教育にも力を入れていきたいと考えております」（細江市長）

市制施行120周年目の岐阜市が展開する施策は医療面、産業面、文化面など、ほかに注目すべき部分が多い。それらの施策が「岐阜都市圏100万人の中核、県都・岐阜市」を常に意識して行われているところに、未来に向かって飛翔を期す岐阜市の大いなる矜持が表れているともいえるだろう。



信長の居城として知られる金華山山頂（標高329メートル）の岐阜城

**信長学を全国に
情報発信する構想も**

「文化庁の調査官なども信長公居館跡の歴史的価値の高さには注目しているようです。発掘終了後には、高知市の坂本竜馬記念館の事例のように、全国の信長公ファンのサポートによる居館復元も考えております。

信長公の素晴らしさは単に事実上の天下統一を、初めて果たしたというだけにとどまりません。時代を改革した先進性と、その背景にある情報戦略、各種の規制緩和、全国に散らばる戦場をブロックごとに分けて担当武将に当たらせるという常備軍編制など、全盛期の戦略的な合理性と隅々にまで至る戦術のレベルの高さは、現代にも通用する獨創性があるといえるでしょう。

岐阜市としては信長学フォーラムを毎年開催し、信長研究のエッセンスともいべき信長学を全国に情報発信していきたい。そして信長公がつくった岐阜のまちを、歴史に思いをはせながら回遊していただく歴史観光、スロートーリズムの実践を提唱し、発信していきたいと考えております」（細江市長）

岐阜城を山頂に頂く金華山のふもとに広がる岐阜公園には、織田信長公居館跡のほか、岐阜市歴史博物館や国内有数の名和昆虫博物館、日中友好庭園など多くの見どころがある。歴史公園としてより親しめるような新たなエントランス、総合案内所などの整備も年内に



1300年以上の歴史を誇る長良川鵜飼は夏の風物詩

完成予定だ。

また岐阜公園周辺には、斎藤道三の菩提寺（常在寺）をはじめとする名刹、古社、古街道などが多数点在しているほか、公園から程近い距離にある長良川河畔の鵜飼船乗り場に至る歴史的町並み（川原町）も無電柱化やペープメント整備が行われるなど、駅前から続く回遊路は完成に向けて着々と整いつつある。歴史をたどり、歴史の記憶を楽しみながらゆっくり回遊するスロートーリズムにはまさにうつつつけの環境といえるだろう。